

昭和大戦と三箇牧村(通観)

宇津木秀甫

戦争の呼称

「先の戦争」「前の戦争」などと呼ぶのは戦争の美化につながり本質を曖昧にする。「大東亜戦争」は日本が侵略戦争を美化せんとして使ったから不適當。アメリカが使っていて占領軍が押しつけた「太平洋戦争」の呼称は、アジアに迷惑をかけた事をわざと忘れさせる。「アジア・太平洋戦争」が正確、しかし長ったらしい。満州事変、上海事変、北支事変から支那事変を含め、昭和 16 年米英など連合国に宣戦布告してから 20 年に無条件降伏するまでを「昭和大戦」と呼ぼうという最近の説に賛成する。

戦争に突入の頃

昭和大戦前半期の三箇牧村は、大正 6 年大塚切れ被害の復興さ中、小作争議が起こった。小作料減・免要求などを巡って地主と対立。柱本、西面の小作争議は貴重な入権闘争で、耕作農民こそ農地を持つべき、と正論を伴った。大正末期から昭和 5~6 年まで尾を引く。これは全国的趨勢で、政府は自作農創設と農事実行組合による殖産奨励で対応した。村で製縄工場ができ、夜なべで製縄機のペダルを踏む農家が現われた。

次に米価と戦争の関係を見る

(60 疋、4 斗俵の単価)

年	円	銭	
大正 15	12	70	
昭和 2	10	85	金融恐慌
3	10	62	
4	10	40	世界恐慌
5	6	28	
6	6	50	満州事変
7	8	20	
8	10	80	米穀統制法公布

9	14	80	
10	10	90	
11	11	80	日独伊防共協定
12	12	90	支那事変
13	13	42	
14	16	35	第 2 次世界大戦
15	16	30	
16	16	50	米英に宣戦布告
17	16	90	食料管理法施行
18	18	42	
19	18	80	
20	100	23	8 月無条件降服

村の農村色強まる

明治の初期は大動脈淀川に沿った唐崎、三島江、柱本は経済面で近郊的産業に発展させる可能性があった。明治 12(1879)年の唐崎は専業農家 114 戸、農業兼業 107 戸、商業 25 戸で、大正になると船工場もうまれた。昭和になると銭湯もうまれた。三島江と共に近隣農村が米穀出荷をする港だった。

柱本は「くらわんか舟」の発祥地、唐崎だけで 50 石以上の舟 6 隻を持ち、全字で 50 石以下の舟が 59 隻あった。全村合計 65 隻も持っていた。柱本は農職人兼業が 8 戸、農漁業兼業 9 戸、農紡績兼業 175 入、紡績専業 12 人がいて木綿紡績業が成長しかけていた。

しかし、明治 10 年京都・高槻・大阪間鉄道が開通し、その後順次東海道線が完成すると陸上交通が制して河川交通は停滞。

村は戦時下には国家要請に従って食料増産を目標にする村になり、各大字とも農村化せざるを得なかった。都市近郊の利点が活かされず、停滞現象を呈した。

昭和 8 年の米穀統制法施行が村を拘束した。

労力多投多肥多収穫栽培

食糧事情から農地により多くの労力を注ぎ、多くの肥料を投下することで収穫を増やすタイプの米作に変わった。

一方で軍や軍需産業に働き盛りの男性の労働力を奪われ、女性が支える農家が増え、入糞の施肥など女性にきびしい作業をする主婦も見られた。

戦争末期には、艦載機が低空射撃で個入をねらわれる事態となり、それを避けるために月夜に牛を使う姿もあった。

戦争による疲弊としては農業水路の改修が遅れ、田畑への給水に苦勞が増した。

敗戦直後に戦禍が現われた

人糞肥料多投によって農地の土壌は酸性化した。その被害が敗戦直後に顕れた。

大阪へ西面から人糞を求めに行く牛車の列「肥えとり部隊」が有名になったりした。

酸性土壌の水田に更に入糞投下が進み、昭和 24 年には悪天候もともなって、三箇牧の産米 6 割減収という大被害に遭った。事前割当て定められた供出量を減らしてもらわねば白家飯米がなくなる不安のさ中、占領米軍が終戦協定に違反をして直接干渉を行い、供出完納を強要した。米軍に従がわない農業調制委員は強制連行をして神縄の基地づくりで強制労働をさせると脅され、西面では供出した俵がすべて不合格になり、新聞の全国紙が報道、政府はあわててそれまでは不合格だった等外米を 5 等米と認めて供出してもよいと閣議決定をしなければならなかった。村民の要求が高まり、政府は占領軍の手前、悪米を混ぜた 5 等米での供出を認め、農家が飯米(5 等米でない米)を還元配給させ、農民側がある程度の勝利を納め、民主主義が勝利した。

国土山河の疲弊も著しく、昭和 28 年の淀川洪水で芥川堤が決壊、唐崎の祭田堤防も崩れ、家屋浸水の家も多く、収穫前の稲が浸かり、田に土砂流入被害を受けた地域もあつ

た。

応召者と戦死者

応召で兵隊にとられた入数は残念ながら村役場にあった資料を高槻市が紛失し不明。出陣した入数は推定で凡そ 370 名で、三箇牧地区遺族会編の戦没者名簿を参照すると、応召の半数が戦病死した。130 柱の戦病死者のうち、戦争末期の 18 年に 13 柱、19 年に 39 柱、20 年に 55 柱、21 年以降で 6 柱で、139 柱のうち 113 柱が敗戦色漂うなかで亡くなっておられる。

昭和 20 年 6 月、天皇臨席の大本営会議で敗戦止むなし、いつ降伏をするかを協議し、あと一戦、本土決戦で敵に痛撃を与えたほうが国体護持はしやすいと、戦争を続行すると決議し、天皇が裁可した。6 月に終戦にしていれば 33 柱の方は死なずに済んだ。最後の最後まで国体擁護を至上にして犠牲者を増やした。

最終期には戦場ではなく、海域、海岸付近、海上、沖、湾が死亡場所だと通知を受ける有様だった。輸送船沈没が原因だ。

全戦病死者のみ霊がどうぞやすらかでありますことを心からお祈りし、発言を終る。

付記：三箇牧戦争犠牲者追悼平和祈念式実行委員会

プロフィール

宇津木秀甫（うつぎしゅうほ）

1926 年、高槻市三箇牧地区西面で生まれ、85 歳。龍谷大学で仏教学を学び、創作劇運動として「実験劇場」創出。「米どころの報告」その他多数の戯曲を発表。1970 年「えじゃないか高槻まつり」企画、推進して市民をつなぐ努力をする。むかし話絵本 15 冊を発行。高槻で影絵劇団アクト座を西日本を代表する影絵専門劇団に育てた。語りべを育て集団で地域の昔ばなしを公演中